

パネルディスカッション

「水源の里の再生システムを求めて」



コーディネーター: 小田切徳美氏(明治大学農学部食料環境政策学科教授 農学博士)

コメンテーター: 遠藤和子氏(独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所 農学博士)

パネリスト: 安藤周治氏(広島県三次市(旧作木村)・NPO ひろしまね理事長)

青砥昭修氏(喜多方市熱塩加納町黒岩行政区長)

平尾道雄氏(滋賀県米原市長) 白井英男(福島県喜多方市長)

小田切氏

改めまして、またよろしくお願ひいたします。パネルディスカッションに移っていききたいと思います。パネリストの皆さんは既に先程来ご登壇をされて、あるいはご挨拶をされた方々でございますので、ちょうど今ご紹介いただいたということで、私からのご紹介は控えさせていただきたいと思います。

ただし、コメンテーターの遠藤さんは、今回初めてご登壇ということになりますので、ご紹介させていただきたいと思います。独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 農村工学研究所の遠藤さんでございます。そして、実は先程もご紹介ありましたように、当市の出身ということでございます。その点、よろしければ遠藤さんに一言ごあいさつをいただいてから始めたいと思います。

遠藤氏

ご紹介にあずかりました遠藤です。皆さん、本日はようこそ喜多方の地にお越し下さいました。

ふるさとでこのような立派な会が行われること、とても嬉しく思っております。どうもありがとうございます。そして、私大学を出て、国の研究機関に勤めて中山間地域の農地利用問題から出発して中山間地域をフィールドに取り組んでいるのですが、そういったご縁で、この水源の里連絡協議会と連携しております中山間地域フォーラムの運営委員会の末席に座らせて頂いております。そして今日は、ふるさとを抱えて研究者としての立場、そしてふるさとの者として、どんな風にコメントしようかなと悩んでいる所ですが色々な立場からお話させていただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



小田切氏

正にふるさとの誇りでございまして、遠藤さんにはご登壇いただきました。遠藤さんは日本農学学会が出します農学進歩賞を先週受賞されて、これは、日本国内で年間10名しか受賞できないという、気鋭の研究者に贈られる大変立派な賞でございます。よろしければ拍手していただければありがたいと思います。

さて、それではシンポジウムに入っていただきたいと思います。

いただいたテーマは「水源の里の再生システムを求めて」ということですのでございます。これには2つの課題を設定してみたいと思います。当然、再生ということになると自力での再生、今集落が、あるいは水源の里が、コミュニティが、何をすべきなのか、地元が何をすべきなのかということが、まず必要になります。しかし、そうした内発力だけで現在の困難性を乗り切れるようなそういう状況でもありません。その点で2番目に必要なのは、それを支えるようないかなる政策が必要なのか、この2つが重要なポイントになってくるんだろうと思います。この2つを話したあとに会場の皆様方からのご意見もいただきたいと思いますので、ご意見ある方はぜひご準備いただきたいと思います。

時間的にはだいぶ押したということもあって、少し延長させていただいて5時10分ほどを目途に進めさせていただきたいと思います。

さて、一番目のテーマでございます。今、水源の里再生に向けて地元は何をすべきなのか、ということでございます。まず、青砥区長さんから今までの区における取組み、先程お話があったわけですが、それをまとめて少しお考えを披露していただければ、というように思います。青砥さんお願いします。

青砥氏

先程はたぶんに、現状問題の提示ばかりになりましたので、この場では先に繋がることについて、ちょっとお話できればと思っています。まず私の行政区は人数がほんとに6人、戸籍はなくても出身者の方なんかがいるので、それを含めても10人に満たないという集落ですが、その集落をかつて250人いた集落の活気に戻すというのは、極めて困難な状況です。ですので、全く同じ形を再生するというのではなくて、新たな形で再生していくということをテーマに取り組んでいきたいと思っていますところであります。



先程ちょっと申し上げましたが、現在、福島県単独の補助事業過疎中山間地域再生支援事業というものをいただきまして、その補助金とそれから農林水産省が今年だけ募集をかけた地域力発掘支援事業モデル地域を300箇所、実際には327箇所を指定しての補助事業ですが、その2つをいただきまして再生事業に取り組み始めた所です。前途多難、どうなるかまだまだ未定なんですけど、先程もちっとお話ししましたが、限界集落という言葉は私も非常に抵抗がある。これは人間に例えていうと、がんの告知と同じようなもので余命いくばくもないと。通常そういう場合は手術、もしくは抗がん剤、ところが医療機関では自然治癒という言葉がでて、治療方法も今そういうのが出ています。であれば、過疎集落の自然治癒とは何かというような発想も出来なくはないですから、そういう点で私は行政区で事業に取り組んで行きたいなとは思っている所です。

まず、その際の一番のキーポイントは、従来その地域に生まれ育った方々、もしくは地域の方々の発想の転換です。発想の転換というと極めて難しい、全く新しい物を想像しなきゃならない風に皆さんお考えですが、実は生まれ育って当たり前に見ていた事、物、そういったものへの価値観の与え方を少し考えてみる。

例えば、具体例でいうと炭なんていうのは、昔、戦後その近辺では煮炊きをする、暖をとるということだけだったんですね。ところが昨今では、医療の遠赤外線効果ですとか脱臭効果、除湿効果、そういったものがあります。さらに、私のところではできればそれを楽器にできないか、そういったことも考えてみたいと思っ

ています。そういう意味で、従来当たり前のこととして受け入れていたことを価値観を少し変えて見る、そうしてみると意外と今、都市部を中心に憩いとかソフト、そういったもののニーズが大変広がっているように思う。ですから、時代のニーズに合わせるということももちろんですが、さらに従来当たり前として受けとめていたものに新たな価値観を転化してニーズと逆に提唱していく、提言していく、あるいは提示していく、そういったものがあいう自然環境の多い所、あるいは過疎集落には可能なのではないかという風に考えています。その際に、どういったものを提示したらよいのか。

これは大きく2つあって、物と、あるいは人、私はまず人という点で高度成長期を終えた今、人々が一番欲しいのは憩い、安らぎ、癒しだと思うのです。それが証拠に、従来の観光地というのは一様に廃れきていますね。人口減少、経営困難、これは従来型のニーズから外れてきている。要するに、憩いをそこで求められない現状ができた、ではどういう所に価値観を求めるかというと、すべてが揃っている所ではなくて何もない所、静かな所、自分が自分でいられる場所、そういった所にニーズが深まってきているのではないかと。

そういう意味では、過疎地域・水源源流域というのは非常にマッチした情景を整えている。人々が動かなくても自然環境で、そういったものがかなり存在している、そういう事が言えると思うのです。

それからもう1つ、これは人心的に言いましたが、物で大量生産できないけれども、全国的にみると珍しい物、こういった物もあちこちの山間集落には存在します。具体的にいうと・・・皆さんのお手元にあるスローライフ黒岩銀座というのがありますが、これは私たちの集落で事業計画も立てたものです。その中で「行者にんにく」ですとか、「かじか」とか市場にあまり出回っていないのをやってみようということを考えています。これは、全く新しく始めようとする非常に難しいのです。「かじか」というのは私たちの集落に流れる川に実際に自生しております。ですから、自然環境としては条件がそろっている。あるいは、行者にんにくというのは皆さんご存知かどうか知りませんが、非常に豪雪地帯にのみ生息する。にんにくと名前がついていますから、ちょっとにんにくのおいがる山菜の一種です。非常にこれはおいしい、しかも病虫害が全くない。ほったらかしでいい。ただし、種を蒔いてから収穫まで最低5、6年。株分けして大きくなっていくまで7、8年から10年近くかかるというものなんですけど、こういう種蒔き、あるいは苗を購入、そういった事で地場産品に繋げていく。どこにでもあるようなものでなく、その地域のみ生息する、もしくは、その地域にあったものを作っていく。こういう事も自立ということで不可欠であろうかと思うのです。

ですから、そういった物、人心・・・人の心が憩えるということと、それから非常に珍しいけれど、この地域に特産できるというものの開発、こういったものを補助金を利用しながらやっていくことが自立再生にある程度効果があるのではないかと考えています。結果的にその事をやることによって何を目標とするのか。私が考えているのはかつて集落を後にした人々がもう一度・・・定年後でもいいです。戻って来て老後、集落再生に日常をなすということと、他地域との交流あるいは二地域居住なんて言葉が流行っていますが、そういった要因に繋がっていく、そういうことを通して集落、あるいは行政区の収入が確保できるのではないかという風に考えている訳です。

小田切氏

ありがとうございました。青砥区長さんの所では正にそういう地道な取り組みを始めているわけなんです。白井市長さんどうでしょうか。市長さんとしては行政的にこういうことをやるという、そういうプラン・ビジョンをお持ちなのですが、それは少し置いといてですね。地域としてはこういうことを自らやってほしいんだという思いなどありましたらご披露していただきたいと思います。

白井市長

皆さんさっき報告されて、かつ小田切先生から素晴らしい基調講演もいただいたので、あんまり私から言うこともないのですが、私はこう考えているのですが、先ほど小田切先生の話にもありましたけれども水源の里対策ということで銘うって何かをするのは限られた、最終的に何かするということはあるかもしれないですが、市全体が人の空洞化が起きているとかですね、あるいは土地の空洞化が起きているとか、そういう事態になっていますから、市政全体がそういう方向で考えなければいけないのではないかという風に思います。



すると私は常に言っているのですが、日本国がどんどん東京に人もお金も物もみんな集まりすぎていると、正にそれが結局こういう事態を招いているということなので、その流れが弱まらないと結局個々が努力をしても皆、崩壊していつちゃうんですね。

そういう事を考えてみると、私は不謹慎な言い方をすると、今回の株の下落というのはある意味、これは新しい局面を世界にもたらすことになるのではないかということで、漠然とはしていますけどね、思いますに逆に今度農村部地方が見直される時代になってくるんじゃないかと。つまり、バーチャルの世界でこの取引をしてそこで価値が生み出されていくと、それによって儲けて、その金があっちこっちいって物価が上がったり経済を豊かにしていく錯覚というのを今まで持ってきたというような、正に世界全体の物に対する物の価値観が変わらなければいけないのではないかという印象を私は持っていて、それが今回を契機に変わってくれるとありがたいなと・・・

私は、ここには東京に集中した、先程の人、物、金を、いかにして地方に還流させるか、同時にそういうシステムを作るべきでないか、というふうに主張してまいりましたので、そういう流れを今後も強めていきたいと・・・それが地方が豊かになることに繋がるのではないかと。今まで過疎法2回やりましたが、結局先程言った東京に対する吸引力が強いためにいくら金を戻して補助金を出しても結局はうまくいかなかったんですね。

だから、その経済全体の仕組みがやっぱり大きな原因なのかなという風に考えるのですけど・・・それはさておいて、そういう中であっても地方で生き延びるために何をしなければいけないかという、これは水源の里の会長さんがあいさつで申しましたけど、私は2つキーワードがあります。

1つは「自立」です。それと「手作り」です。これが私は決め手ではないかと思いますね。市長になりましていろんなことをやっていますが、たとえば道路を作る時も皆、道路を舗装してくれ、俺の所をなんとかしてくれと、こういう話が出るのですが、いろんな意味で限度がありますから、その時に是非自分らが手作りで道路作りをやってくださいと。それを私ども市が支援するといった形をとりたいと申し上げまして、皆の道作り事業みたいなものをやりました。公園を整備してください。分かりました整備しましょう、と。でも、できた後の管理はみなさんでやって下さいね。というようなことでいわゆるそのある程度の均衡的なバランス的なことはやらなくちゃいけない面はありますが、しかし、自分らが最終的には責任を負うんだというような状況をずっと作っていくことが大事なのではないかと。

その延長線上にあるのですけど、さっきの先生の話でたいへん感心したのは集落での、ものの決定の時に今までは一世帯一票制になっていて、それは男の人が出て女の方は後ろに隠れていてということなんです、これからはそうじゃないと。もう女の方も出て投票するという流れを作るべきだと。これは私もすごい考えだと思っています。できるかどうかはいろんな努力をしてみないとわからないのですが、その延長でいえば私は学校教育で色々やって子供たちが勉強して、勉強の出来る子はどんどんいい大学へ行って、東京へ行ってあるいは海外まで行って勉強してくる。それは大変いいことであるという風に今までは考えていましたけどもう一回考え直してみると、果たしてそうなのかなと。自分の地方のことも知らないで偏差値だけ

考えて、いい大学行っていい就職口に入って、それで世のためになるんだというふうに教えられてきた。あるいは社会が教えている。果たして、そうなのでしょうか。もっとやっぱり自分のふるさとを見直して、あるいは農業も見直して、その良さの中に自分の生きがいを見出す、それを誇りに思うような教育があってもいいのではないかなというような気もしたんですけどね。

今、この先生の本に書いてあるんですけれども「幸福の経済学」という学問がありましてですね、幸福とは何か、というと日本はどんどん豊かになりましたよね。物が豊富、食べるものは不足ない。でも、本当に幸福かというそうじゃない。なんでかという、いろんな決定ごとを人が決めてしまうからです。自分が手作りでその議論に参加して決めていって、それで自分も参加したんだってことになれば、いろんなことが自分の責任の中でやれると。

こういうことなんで、ある意味ではそういう基本的な民主主義の原点が日本全体でおろそかになってきていたのではないのかと、もう1回仕組みを見直してみる時期にきたのかなという感じをいたしました。1つは「手作り」ということですね。それから「自立」ということですが、これは今、青砥さんもおっしゃって下さったので私は賛成なんですけども、合併して、行政の手抜きが始まったと。我々に対する熱い眼差しがぼやけてしまったと。そういう面もあるでしょうけど、私みたいな立場から言わせると、合併して資源が豊富になったと。いろんな資源の種類が豊富になったと。いろんな人が大勢出てきたと。いろんな歴史がいっぱいあるというのが分かってきたと。もう1回足元を見直してみようじゃないかと。足元を見直してみて、その中に新しいもの、今風で見直してみても新しいものが必ずあるはずだと。それをもう一回磨きをかけて、それを世の中に出していくと。あるいは自分らの経済生活を豊かにさせるために使っていく事をやろうじゃないかと。ということを私は申し上げておりまして市役所職員を含めて、地域の皆さんにお願いして、そういう町づくりを一生懸命やっておりますが、その延長線上に私は水源の里の繁栄があるのではないかと。平場に住んでいるよりも水源の里に住んでいる方がはるかに贅沢だし、はるかに豊かだよというような価値観が生まれてくるのが大事なのではないかなと。今日の講演を聞きながら思った次第でございますけども、先ほどの手作りそれから自立ということは私の市政の基本方針でもありまして、そんなことを心がけてやっている次第でございます。

小田切氏

ありがとうございます。手作りにつきましてはいつてみれば地域の民主主義の原点なんだという、そういうことを教えていただいたと思います。それでは平尾市長さん、水源の里条例の中で地域に何をしたいのか。そういう熱い思いが語られていたわけですが、その点も含めてぜひご意見をいただきたいなと思います。

平尾氏

先ほど小田切先生の非常にまとまった論理的な話を聞いて私もなるほどなと思ったんですけども、繰り返していえば私は誇りとか自信、このことを水源の里地域でもういっぺん高めてもらう、このことがものすごく大事だと思っております。

話が横へそれますが、実はこの水源の里の議論をしている時に東草のまちづくり懇話会、今日も会場に来ていただいていると思いますが、そこには、その小中学校一緒になった学び舎があるんですけれども、その20数人の子供たちに演技指導に行っている私の町のボランティアがいるんです。あるとき、彼がこんなこと言いました。演技指導するのに人間関係を作るためでしょう。子供達に「食べ物では何が好きですか」と聞くと普通はどこ地域に行っても「ハンバーグが好き」とか「カレーが好き」とか「焼きそばが好き」と答えるのだけど、この東草の小中



学生に聞いたら「このキュウリおいしいよ」「このトマト甘いよ」という風に言ったというんですね。彼はすごくショックを受けた。ショックというのは言い換えるとびっくりするんですね。「カレーが好き」「ハンバーグが好き」という答えを期待していたら、そこに暮らしている子供はこの地域のお米やキュウリやトマトおいしいよ、と言った。すごくショックだったというんですね。そこに子供たちは大人以上に誇りも自信ももって育っているのです。そのことをちゃんと教育や、いわゆる生涯におけるそこでの暮らし方で私たちが本当に伸ばしてきたのかどうか、このことを私は問われていると思います。

具体的に言う地域は情報発信、自信を持って始めてほしいと思っています。情報発信する時にはできるだけ具体的に分かりやすい物や事、例えばお祭りであったり、先程炭の話も出ましたがそういう炭であってもお祭りであってもいいし、皆さんそこで生業として物を作ったり、ともに作業していること、一杯あると思うんです。とくに基幹産業といわれる農業や林業ということに関わりながら言えば、ずいぶんそういった技も失いつつあるわけですが、今こそ、そのことについて特に地域の子供たちももちろんですけど市内、市外の人達に是非それを見せてあげて欲しい、そのことで魅力がさらに増すし、魅力について自信や誇りが生まれてくる。そういう情報発信をするということをやしてほしい。そのテーマはきわめてこだわって、暮らし、生活、食べたり、働いたり、あるいは水へのこだわりであったり、環境へのこだわりであったり、ずいぶん私たちの先輩が暮らしの中で作ってきた技や生業がいっぱい埋もれていると思うのです。

そういうことを情報発信して欲しいと思うのが1つと、もう1つはこの町、この地域にこだわって生活しよう、ここで生きていこうという、少し抽象的な言い方をしますといわゆる自治というのですが、ここで頑張るよという事をぜひ生活感としてこれも情報発信ということになるのでしょうか、仲間作り地域づくりとして内向きにもエネルギーをたくわえて欲しい。そういう思いがします。

実はこの東草のまちづくりの方たちが例えば…具体的な例ですけども確か今年の冬場に実はNTTのアンテナが立ってないために携帯電話が聞こえない集落がある訳ですけども、ここをなんとかしようということで、いわゆる一番北部、一番行き止まりの所にありますスキー場に来る、そういう人達に署名活動をしてアンテナを建てる運動を起こす。私も最終的な参加をさせてもらってNTT側は署名運動があったからということとは公には困るけれども、そういった携帯電話が通じないのは問題だということで、そこにアンテナを建てる約束をしてくれました。具体的にそこで頑張れば成果が出る、成功事例が作れるという例です。

もう1つは谷あいの所、何も無い広場でフリーマーケットをやって、皆で物を集めて人が来ないだろうかとということで議論して始められました。1回目の去年は雨で失敗しました。今年も小雨は降りましたが小雨決行で始めてもらいました。大変人が多かったというわけではありませんでしたが、やっぱりそこで食べ物を提供したり何でも無い暮らしのレベルの商品なり、物を見せる時に皆さん大変生き生きしておられました。そういう意味で、自分達のやっていることを人に見せることを通して、おそらく私が知らないところでものすごい議論をされた。苦労もされたと思うのですけども、そのことを子供たちが見ているし、そのことを関心持たなかった地域の人たちは間違いなしに見ていると思うのです。そういう、自らの地域に誇りや自信を持って頑張っているというアクション、動き、このことを作るということを地域に期待したいと思います。先程言いました1つは情報発信して欲しいということと、地域にこだわってここで頑張っているんだ、というアクションを是非起こしてください。このことは、私はあらゆる水源の里での地域再生に向けての大事な出発点になる、そんな思いであります。

小田切

ありがとうございます。地域の誇りやそれと情報発信が一種の相互作用を起こすという、そういう新しい論点をいただきました。それでは安藤さんどうでしょうか。実践家としての側面と同時に研究者との側面、両方

をお持ちなんです、特に今回は実践家として今まで地域の中で何をやることによってその地域が伸びたのかその辺の秘訣を教えてくださいませんか。

安藤氏

秘訣ということにはなりませんけど、僕は集落というのは千差万別だろうと思っています。それぞれの集落のイメージがずいぶん違うのではないかという気がします。ちょっと頑張ればなんとかなるような集落もちろんありますし、ほんとに平均年齢でいくと70～80の集落も当然あるわけでそういった所にどう力を注ぐのかということになると、対応策というのは千差万別ということになると思います。



まず最初に・・・小田切先生の話でいうとGM、地域の実態をきめ細かく把握する作業がまずないとどんな手立てでもできないんじゃないかと思っています。私自身60年近く村で暮らしているが昨年から今年にかけて6～7回場所を替えながら悉皆調査に入りました。特に一人暮らしやお年寄りの家庭を中心に回って話を聞いてみると集落によってその考え方や取組み、ものの見方、考え方、これからの生き方というようなものも全然違って見えてくる。私が想像して入ったことと答えてもらえる中身が全然違うということも、度々だったわけです。そういう意味では皆さん方地元のことは知っていると思われるでしょうけれど、まずそれは間違いだと思っていただきたいと思っています。そういう意味では少し本気に考えられれば腰を据えて地域を歩くということをまずやって欲しいなと思います。そのことがない限り、靴の上から足を搔くみたいでそんなに的確なことはできない。

行政の方が国は地域のことを何もしてないと言われるのと同じように市町村役場の皆さん、職員さん地域のことはあまりご存知ないということが如実に感じます。是非出かけて行ってもらいたいと思います。覚悟はしていただきたい、時間がかかるということ。まず30分はお天気の話。1時間たつてようやく仕事の話や日々の暮らしの話になってくる。そうなってくると玄関から土間に入らせてもらってちょっと玄関のかまちに座らせてもらうふうになる。で、1時間過ぎた頃からようやく居間にあげてもらって腰を据えて話を聞くということですから最低2時間は必要。3～4時間覚悟して出掛けて欲しいと是非思います。特にお年寄りの場合は喋りたいのです。とにかく自分のことを喋りたいし聞きたいという思いですから、そういう意味でまさに福祉の出前サービスですね。

ですからデイスサービスの逆デイスサービスという言い方をしていますけどもそんな感じで調査に出かけて行っていただきたいなという気がします。そういった個々の実状が分かってきて始めて、じゃあ課題解決のためにどう動かかという話がきつと出てくるんじゃないかと思っています。今1つ先程のパワーポイントやお手元の資料にあるんじゃないかと思いますが、地元の方々が非常に気にされていることの1つに安否確認というのがあります。私の村もかつて昭和25～26年全国的だと思いますがその人口が多かったとき7000人いました。現在が1800を少し割り始めています。大変な減少率でもあります。じゃその差はどうかというと町の方に皆さん出ていらっしゃるわけです。援護関係があるということも含めて言えば大変な方が町の中にいらっしゃるというわけで、そういった方々がお年寄りを残して出ていらっしゃるって日々の生活に関して非常に心配されている。そのことを情報提供することはできないかという我々の思いもあります。

まちの息子さん、娘さんには聞きたい、知りたいということもあるものですから、去年は人間がこう歩いてお尋ねしていく事で安否を伝達しようという実験をやりました。安否確認のサービスです。これも先程のパワーポイントでお話したように安否確認だけやると効率が悪くて、食事の配食サービスとあわせて1つの事業として展開して、個々のお年寄り等を訪ねて展開できるわけですから家の周りだとかあるいはお年寄りの顔色だとか、あるいは最近の変化だとかを聞きます。変なセールスマンが来たよという話も当然聞くわけです。そ

ういったことをフォーマットを決めた中に書き落としてそれをFAXか携帯のメールで返して…月3000円ぐらいの契約でどうですか、という話をアンケート調査しながらやりました。

今年はもう1歩進んで、ネットを使ってWebカメラでお年寄りのリアルタイムな状況を伝えるシステムがハード整備を入れて5万ぐらいで実現できそうだということになりました。ところが両方にインターネットの整備ができてないとまずいので、それは光ファイバーが入っていますからじいちゃんばあちゃんにインターネット契約、その工事となるのですがやっぱり4~5万位かかるということなので、市役所にその下り回線だけ使うような光サービスや目標の半分ぐらいしかできてないんじゃないですか、みたいなおどしをかけながらモデルケースで施設整備は無償でやってくれないかというような話をやりはじめてるわけです。それができると町に出ているその人達がお父さんお母さんの健康状態というのもWebカメラで見ることができるといようなサービスをこれから展開していこうということで、今下調べていくと5件ほどオファーが来たりして準備をしているわけです。そういった形で地域を歩き始めて課題が出てくる、それを組み立てていって解決の方策を見出してくる。これはきっと新しい作業にもつながってくるだろうと…。

その作業をしている中で我々は狭い範囲の中で思っているんですけど、これだけ高齢化が進んでくるとじいちゃんばあちゃん、お年寄りのニーズの把握…これ流通業界なんですからけれどもその新製品を作ってマーケット調査をやる。マーケティング調査にそういったネットが使えないかということなんですね。全国で高齢者10万人モデルにすれば仕事になるような話も出てきて、ああ、やっぱりスケールの大きい所でそんなこと考えている人達もいるんだなあということでそういう業者と今、話もしながら、これからもうちょっと枠を広げるということをやっています。そういう意味でぜひとも地域に出て欲しいなと思っています。

小田切氏

後者の話は、もっとも新しい動きですね。山口県の旧錦町という所でも同様の試みが出てきてますがIT、あるいは携帯電話と安否確認を組み合わせるような動きが出てきています。前者の話は非常に刺激的で、いささか強引に言ってしまうと市町村の職員は行政はそもそも地域のことを何にも知らなかったという。そのことをむしろ前提にして、地域のことを改めて見つめ直す、そんな事も必要ではないかという問題提起でした。あとでまた重要な論点ですので議論させていただきたいと思いますが、遠藤さんいかがでしょうか。今までの話を聞いて何をすべきかという論点、色とりどりのものが出てきたように思うんですが、ぜひ遠藤さんのご感想をいただきたいと思います。

遠藤氏

確かに今まで議論はしつくされてきたような感はするんですけども、小田切先生の資料の6頁の図をちょっとお借りして、再度私なりにポイントを3つ位しぼってお話させていただきたいと思います。ここで地域づくりのモデルとして参加の場づくり、暮らしのものさしづくり、お金とその循環づくりというものが相まって、それが地域自立となるんだというような図が書かれております。ここに括弧書きで書かれているんですが、内発的な発展と言う風に書かれております。今日の話はまさしくその内発的発展というのが大きなキーワードになるんじゃないかなという風に思っております。私達中山間地域フォーラムが国土形成計画が策定されているときにまとめた提言の中で、内発的発展という事もコンパクトに非常に奥の深い言葉なんですけどもまとめた言葉があります。それはどんな風にまとめた言葉なのかというのをちょっと紹介したいと思います。

内発的発展論というのは地域に暮らす住民や、あらゆる組織が自発的な学習によって計画を立てて地域に根ざした技術を元にして環境を保全しつつ、地域の文化をいかに経済発展を図り住民の福祉、生活の向上を目指していく、それが内発的発展であるという風にコンパクトにまとめてあるんですけども、小田切

先生の話の中で世界的な潮流の中でグローバリゼーションに対する対抗といったようなことが出てきたと思うんですけど、まさにこの内発的発展というのはグローバリゼーションによってもたらされた環境破壊であるとか、温暖化の問題であるとか、食の不信の問題であるとか、我々人間が本来持っているコントロールの機能を超えている所で起きている問題に対抗する動きになるのかなという風に思います。その内発的発展のポイント、3つにしばってまとめてみたいと思います。

まず内発的な動きが必要なのかということですが、おそらくこういう難しい状況の中で地域づくりに取り組んでいくためにはあとからあとから次々と起きてくる問題に対してどんどん問題を解決していく能力が問われていくことだろうと思います。つまり問題を一つ一つ解決しながら、そこに住む住民が、あらゆる組織のメンバーが、その問題を解決していく能力を一つ一つ構築していく能力構築が必要になっている。それを実験するのが内発的な発展の方向であろうという風に思います。それが1つ目のポイントです。

2つ目のポイントとしてはこうした状況の中で、経済的な基盤を作っていく中ではビジネス的なセンスも必要です。しかし向かっていく方向は地域にある技術に根ざしていて循環型であってそして地域福祉を目指す地域社会の再生に目指すものでなければならない。じゃあビジネスも重要だしそういうものも重要だといったときに、これまであった産業のモデルの中ではやっぱり解けない部分というのもあると思います。それを新しく提案していくためにはビジネスのセンスのある人、そして暮らしのセンスがある人というようないろんな個人であるとか組織がパートナーシップを結ぶということによって、そういう道が開けるのかなという風に思います。

たとえば商品開発をするのに学生さんのセンスを生かすとか、あとお母さん達のセンスでもって道を切り開いた事例と言うのは非常に多いんだろうなという風に思います。

3つ目のポイントなんですけどもこれは最初申し上げたグローバリゼーションに対する対抗の力ということなんですけど、それに対抗するためにはやはり地域を生かすことがその道になるんだろうなというふうに思います。つまり答えは地域、足元にあるということです。で、先生の図の中では暮らしのものさし作りという風に書かれています。

価値のものさしの変化が見られるという言葉にも象徴されていると思います。そして先生の話の中で非常にもう日本がとるべき指針だという大きな話が出てしまったんですけども示されたその4つの経済戦略というものがあるうまいけば、例えば今グローバリゼーション化の中で一般的に示されてきた産業化モデルに対抗する新しいモデルというものをこの地域からこそ提示できるのでないか。その意味でもこの地域がフロンティアになるのだろうという風に考えます。以上3点の意味から内発的発展というものの重要性というものをあのかないという風に思います。以上です。

小田切氏

ありがとうございます。私、秘訣を教えてくださいという風に先ほど申し上げたんですが4名の方がお話ししていただいたことはそういう小さな秘訣ではなくもうちょっと大きく位置付けることができるんだ、そういうかなり普遍的なものを方向性を持った戦略といいましょうか、こういうことが語られたんだという事を3つの点で非常にクリアに整理していただきました。ありがとうございました。

それではその地域の戦略を背景にして、しかしながらいくら言葉を重ねても足りないんですが水源の里がそれだけで自らの足で立ち上がると思えない。ここにはやはり政策の力が必要です。この政策の力はひとつは地方自治体からの政策、そしてもう1つは国や県からの政策、2つに分けることができるんですが、まず青砥区長さんは地方自治体、市が今何をすべきなのか、そういう話を少し大胆に語っていただきたいと思います。隣に市長がいることは無視して語っていただきたいと思います。

青砥氏

市長がご退場願った後ならしゃべるんですが、たくさんあるんです。たくさんあるんですが、そのたくさんの中にあまり触れたくない、というのはもっと大事なことがあると思うので、たくさんの中のいくつかを例に取りながらもっと大事な所の話をしたいと思います。具体的には例えば過疎対策といった場合に今これだけインターネット情報化が進んでいるわけで、喜多方市ではADSLというインターネットシステムがありますけれども、光ファイバーは当然私たちの集落には何年経っても入らないんじゃないかと・・・岩盤の中にずっと埋めなきゃいけないわけですから、もしくは電線を通すといっても、雪で木で切断される可能性もある。あとはニーズがなかなかないということで難しいだろうと思いますが、人を呼び込むについても特に若い世代を呼ぶにあたっては、このインターネットが通じないというのは決定的なんですね。私、週1ぺん大学で教えていますけど、インターネットが通じないというとそんなところに行きたくない、遊びで行くならいいけど住みたくない・・・それが普通です。それから携帯電話が通じないと。それからもちろん地上デジタルになった時に私たちの集落はテレビが見られないのかと思うとそんなところに人に来いとはなかなか言えないですよ。ですからそういったものの整備というものは本当の過疎対策と考えれば必要ではないかなと思います。

それからもちろん生活道の安全確保です。豪雪地帯があるゆえに、雪崩、落石、土砂の流出、倒木、そういったものが日常に常に危険として存在するうちはたとえ事業をやったとしても交流促進が難しいわけです。人を呼んだ、途中で落石があった、死んだ、もうそんなこと出たら来ないですよ。ですからそういった意味で私達ではどうしようもない問題についてはある程度、お力をお借りしたいなと思います。

それからできれば喜多方市としてほんとの過疎集落に対しての補助金制度「自由に使ってよろしい」と・・・市長、よろしいですか？あの、審査も非常にゆるい、面倒くさい役所の書類はできるだけ軽減して、本当に自立しようというものに対しては非常に肝要な制度を設けていただければなと思います。まあ難しいことは重々承知の上ですけれども。

まあそういった具体的なものをいくつか上げて、いろんなことが出てくるので、そうではなくてもっと根幹部分を私は考えたいんですが、とにかく市に限らないですが、行政機関・・・といった所の方々が具体的に現地に足を運んでいただきたいと。具体的に見ていただきたいと。地元の住民とふれあっていただきたいと。行政マンとしてではなく、一住民、一人間として接していただきたい。そういう事がなければ実際の問題点というのは浮上しないと思います。外から客観的に見ていたっていくら見たって問題点、ほんとの問題点は分からない。例えばこういう会議をいくらやってもなかなか出ない。もしこれが米のジュースだったらもう少しやべれます。皆さんももう少しきつと笑顔になるでしょう。そういったふれあいが行政マンとあるいは過疎の所で実際にされたならいろんな所から入ってくるデータとか情報をもとに、物事を考えることは少し減るのではないかと思います。そのことが一番過疎集落にとっては必要で、情報を要約したもの、あるいはデータで集計したものっていうのは過疎集落の現状とはだんだんかけ離れていくんですね。

日常の問題点とは、そういったことで現状にあった政策はなかなか出てこない、データや情報収集によってまとめた政策というのは必ずしも現状に合っていないことと、それからそういうことを繰り返す事によってどういう発想が出るかという、費用対効果の政策に陥りやすい、費用対効果によってなされることはこれは絶対に必要かとは思いますが、一方で過疎地域にはそういうものが逆効果となっている。真に過疎対策を考えるのであれば過疎地域に関して費用対効果というのはあまり前面に出さないほうがいいのではないかな。この費用対効果という考え方を過疎地域に当てはめると、当然少数切捨てになります。これは実感している立場として申し上げますがその結果地元の人、あるいはそこにもう一回戻ってみようかなとか、他地域から居住してみようかなという人に対して安らぎの場を喪失させることになります。それから広く考えれば山岳文化が非常に盛んですけれどもそういった現象へとつながっていくということだと思っんです。で、思い切って

私が行政機関へ望みたいことは、物事を判断する時に旧態依然とした価値観で判断していただきたくないということです。で、価値観は新たに足を運んで接することによって自分で発見して新たな価値観を作り出す、それから新たな政策を作り出す努力をしていただきたい。その判断材料はデータでも情報でもないということです。人が足を使って人の顔を見て、そこから得た実感で情報政策を作っていただきたいと…その方が一番大事なことはないかなと思います。

小田切氏

ありがとうございます。人が自らの足で考えて政策をせよと、行政を運営せよという提言であります。これは我々非常に重たい言葉としてですね、ぜひ共有化したいと思います。この点、後でお時間あればまた議論させていただきたいと思いますが、それでは市長さん今の自治体としてという議論もあろうかと思いますが、国に対してあるいは県に対してどういうふうな制度、施策という物があるべきなのか、細かいことはいろいろあると思いますがそのエッセンスだけでもお知らせいただきたいと思います。

白井市長

今青砥さんからいろいろ注文が出たから言っておかなくてはいけないでしょう。1つ目は青砥さんの黒岩地区は、先ほど青砥さんが吐露されてましたけれども、県の補助事業の指定を受けました。これは福島県にしては珍しいんですけども90%の補助なんですね。全体としては県が80、わたしの所が10、それで90になるんですけども大変な補助です。それからもう1つは農林水産省のその地域の資源発掘事業というのが100%の事業です。これは私が皆さんにお話して、いい制度があるからやってみないかと。ただし皆さんの所で自分で計画を立てて下さい。それで私の方もアドバイスいたしますけども、応募して採択になるかどうかはそれぞれの所で判断されますよということで申し上げました。見事に2つとも取っちゃったんです、黒岩地区が。今、青砥さんばやいていましたがすごいですね。私はこの事業をやってみてその成果を是非見てみたい。ある意味では実験的な事業ですからこれでうまくいくと新しい成果が出てくるということであれば、それを生かして次の政策を考えたらいいんじゃないかと思います。

それから費用対効果の話は…費用対効果の時に常に大事なんですけども、その費用の中からはいわゆる国からのお金とか県から来るお金、補助金部分は除かれるんですよ。ですから費用対効果は莫大に高いはずですよ。いろいろ過疎地域の事業をやるときには、そうすると間違いなく普段は1以上でなくてはいけないんですが、それ以上の数字が出てまいります。それは事業採択について私は常に費用対効果が必要であるということですが、地域の実態をうまく捉えてちゃんとできるようにしてやりますから、少数切り捨てなんてそんな恐ろしいことは考えてません。少数を大事にして弱いものを大事にして育てていくというのが私の基本姿勢ですから、そんなことを皆さんの前で言わないで下さい。よろしくお願いします。

それから過疎問題の基本的考え方ですが、どうも私の国は小田切先生の先ほどの話で省庁間の垣根がなくなっ大変いい雰囲気であるという風におっしゃって、大変素晴らしいと思うんですが、中山間の直接支払い制度というのができました。これは私大変評価しているんですけども、農地のいわゆる中山間における国土保全的役割ですね、これを非常に重視して生産・経済性も加味したんですけども、むしろそっちの方を重視して考えました。農家所得の方も考えたでしょう。過疎対策の今までの流れはどちらかというと地域対策なんですね。その地域をなんとかしなくちゃいけない。その集落を何とかしなくちゃいけない。というそこに視点を置きすぎている。もっと私は国土保全的な、あるいは環境保全的な、あるいは水源保全的なそういう視点が必要なんじゃないかと。そうするとずっと違う政策が出てきて、その集落を維持してそういった政策をやることの方が国としても B/C(ビーバイシー/費用対効果)がいいし、人がいた方がうまくいくに

決まっていると、そういう風に私は思いますのでその辺の視点をもっと国に私は要求したいなと思います。

それともう1つやって欲しいのは、これからの時代自然エネルギーを基にした発電というのを盛んに始めました。アメリカ側のとうもろこしでガソリンを作るという話でとうもろこしの値段が上がっちゃったということから、木材をバイオマスにして発電するという流れが出てまいりました。世界の中でいろいろ発明発見が行われておりますけども、私はこれは国がもっと力を入れて国家プロジェクト的な感じで研究を促進すべきだと思いますね。そして我々が悩んでいる足元にある山、森、間伐材、あるいは松くい虫で使えなくなった木材、それらを含めてもっと自然エネルギーとして発電用に使えるようなことを国が考えて欲しいなという風に思っております。それらのことを次の段階で報告書の中に盛り込んでいただければありがたいと考えます。

もうちょっと身近な問題で申し上げますと、職員が合併化いたしまして現場を知らないというお話がありました。益々そういう傾向にあるのかなというのを危惧しております。その1つの是正策として集落相談員みたいな制度も国が考えてくれたということで、これは地域の実態を知っている非常に活発なあるいは識見の豊かな人をお願いしてやることにしておりますけど、それにしても広い喜多方で5人ですから・・・5人じゃちょっと少なすぎますね。もうちょっと数は増やしたいと思いますが。その人達の資質を上げてもらうためのいろいろな研修をやっていただきたいというのはもちろんですけども、同時にその人達だけではカバーできないと思いますので、私が急遽今日のためにじゃないんですけど考えたんですが、市役所職員のボランティア組織的な集落の問題を自らの問題として考えて、それで地域の人と一緒に考えてみようというようなグループ。3人から5人のグループ、それに任意に手を上げてもらう形で募集を開始いたしました。その人達がもうある意味でいえば黒岩地区の担当になって、「俺は黒岩の青砥さんが大好きだから、青砥さんと一緒にこの地区を考えたい」というような事ですね、情熱を燃やしてくれることをやってみたいなという風に思いまして、今組織形成をしている所でございます。そういう形を通じて今までおっしゃっていた市役所の職員が現場に足を運ばないというのを、あんまり私は仕事の中でいろいろやると合併して職員の数も少なくなったものですから、なかなか表向きではできにくいというようなこともありますんで、その辺で知恵を出したらどうかということをやった次第でございます。

あとはぜひ言いたいと思うんですが、私は今喜多方で交流人口を増やそうと思ってですね、観光・交流に力を入れているんです。ようやくこういう世の中であつても喜多方の観光客は減らない。今170万人ぐらい来ます。それでもせいぜいラーメン食べにおいでになるくらいで2時間ぐらいしか滞在しないという問題はあるんです。それでも観光客は増え始めました。その時私共がいろいろ知恵を出して考えてはいるんですが、自分らの中だけではどうしても知恵が出ない。我々がやっぱり自分の足元を見るんですけども、視野が狭いというか世の中の動きが分からないというのか、それで観光カリスマという方をお呼びしまして、あるいはその分野の専門家をお呼びしまして、しょっちゅう地区の座談会まで含めて出させていただいていろいろ専門的な立場からお話を伺い、あるいは精神的な激励までしていただいております。それで観光の方は少し自信が出てきたかなという思いはいたします。

それともう1つは喜多方は蔵の街であります、蔵の数は多いけど観光に生かされてないんじゃないか、という事がありましたものですから、ある大学の地元出身の先生がおられましたので先生のお弟子さん・・・大学院あるいはゼミナールの方々を、ぜひ喜多方サテライト教室という形で作っていただいてトライをさせて下さい、という事をお願いいたしました。5年ぐらいやりましたかね・・・蓄積ができました。蓄積をもとに例の内閣府がやりました地域再生事業に応募いたしましたして何と1年間に3000万ももらえることとなりました。3年間続けたらいいんじゃないかというので今やっておりますけど・・・何を言いたかったかという小田切先生のお弟子さんを是非喜多方サテライト教室でも作っていただいてですね、喜多方の過疎問題を含めて地域問題、これを是非学生の皆さんに色々勉強していただきたいなということでございます。よろしく願います。

小田切氏

大学サイドまでご提案いただきありがとうございます。ぜひ実現させていきたいと思います。平尾市長さん、同様の質問ですがいかがでしょうか。

平尾氏

これは私ども先ほど報告したように、水源の里条例を作ろうとしています。私としましてはこの水源の里条例を作ることを通して政策還付をさせて、いわゆる特例措置とかあるいは特例支援、こういったことを来年度から具体的にやって行きたいと思っています。当然これはまだ議論は尽くせていませんが、期間限定ということで当面は5年間という期限を切つての特例措置対応をしたいと思っています。財源的な裏付けも必要でありますけれども、実は今米原市では地域創造会議という・・・少し説明が要りますので端折ってしまいますが、私達は4つの自治体が集まって新しい自治体を作ったんですが、それぞれが合併するということは極めて多様で多彩で豊かな人達が集まったと・・・いろいろ違いはあるけどそれを認め合うことが本当に新しい価値を作ってくんだという前向きなとらえ方を私はしたいと思っています。過疎地域創造会議でそれぞれの地域や個性を大事にする、そういう4つの自治センターを残しているんですけども、そこでの取り組みとしての多様性を認めていく、あるいは弾力性を認めていく、そういう事業を地元提案で受け入れていく、これを財政に還付するために今年で12億の基金を積んだんですが、来年もできればもう12億積むことでだいたい25億ぐらいを積み、仮に4%とすれば1000万円ぐらいが毎年動かせると。

そういう財源措置をしながらぜひとも地域創造のあるいは地域密着型の事業をやってもら、そのことが水源の里で出てくる様々な課題解決に向かえる担保になるんじゃないか、そのことは行政として是非やりたいと思っています。

それと同時に先ほど出ました支援員の問題、総務省のアイデアといいますか、政策として出ているんですが私達はすでに実践体においてこれは当然ですけど正規の職員が地域に向き合っています。その中では地方自治とか地域振興と一緒に汗をかくて議論をすることでまさにこの地域で何が必要なのかということ汲み上げてもらう、そして作り上げてもらう、政策を作ってもらうという仕組みはしっかり残していきたいと思っています。そういう中身が、背景は実は、今回の水源の里の問題は私は違うところでもう言ったんですが、私達どうしても危機感を持っていますし限界感も持っています。だめなんじゃないかなと。私はそういうあきらめではなくて実はここから新しいものを作り始めているんだという、そういうある意味高い志、気概みたいなものを持って事に望みたい、この事がいわゆる地方自治こそ問題解決に当たって、解決能力を持っているんだという意味でしっかりとこの水源の里を解決するという風な展望をまさに地元やそして市民の皆さんと一緒にやる、このことを私たちの政策の背景にならなければならないと思っています。

もう1つ、国に対して先ほどもすでに発言していただきましたけども、私達はこの条件不利というまさにその条件をどう克服するかという点では、国は過疎ですから過疎法ですよ、というのはまさに従来型でそれはもうやめて欲しいと。過疎になりつつあるという条件でどうしたらもういっぺん元気や賑わいが作れるのか。そういう意味では過疎法の枠を決めるのではなくて、まさに地域実態について柔軟かつ総合的な対応をする。そういう国の役割をはっきりと打ち出してもらわないと地方としてはもう国は信用できないということになりつつあると、この危機感をどう乗り越えるかというのが今大事な問題で、私はそういう意味ではこれから5年間、様々な国の法律も制度も変わるもののタイミングに合わせながら地方はどれだけ頑張るかによって、国がやって欲しいのではなくて、国もやって欲しいと言えるような自治体として成長したいと思いますので、そのことのパートナーは間違いなく地域の市民であり地域の新しい自治会組織、ここの関係だと思っていますので本気になって必死になってやる、そのことを市民と頑張ることが私たちの政策につながってくると思

いますので、是非様々なご指導を賜りたいと思います。以上です。

小田切氏

はい、印象的な言葉を頂きました。国「が」行うのではなく国「も」いっしょに行うというそういう同じ目線での議論が何より必要だというそういう方向性をいただきました。

安藤さん、大変恐縮なんですけどもう時間がなくなり始めていますのでもしよろしければこれが今国の対応として必要だという1点だけ教えていただけませんか。1点だけ絞ってあえて教えていただければ2点目、3点目は懇親会の時お願いいたしたいと思います。

安藤氏

わかりました。先ほども地方分権の先に地域の分権があるという言い方をしました。地域と行政、これは基礎自治体も国も同じような考え方で私は考えたいと思っていますけど、我々がもう1つの役場を提案して、文字もそうなんですけど、どこまでが地域の役割なのか、あるいは行政が責務としてやらなきゃいけない守備範囲はどこなのかというのがだんだんわからなくなってきたというよりも、我々側が侵略をし始めたという部分もあるんじゃないかなと思っています。アウトソーシングをやります。施設の特に指定管理者制度が出てきたのが象徴的だと思うんですけど、行政がどんどん地域へまかせてくる、あるいは民間に任せてくれる中で多分それは、施設管理だけでなくもっとソフトな部分で出てくるだろう、それは集落の運営やそのほかの事業にもあるだろう、そういう中で行政がやらなければいけない所までもそのアウトソーシングをしてやっていく、たとえば社会教育なんかそうですね。

今、公民館がコミュニティセンターに名称変更して教育委員会の仕事の範疇から外れて公民館なんかが存在し始めているわけです。ほんとに成人の教育というのは行政がしなくてもよいのか。成人の教育というのは行政は責任がないのか、というような問いかけもしたいと思うんですよね。そういうこれからの住民自治、地方自治を考えていく中でそういう時代の変化と共に変わって来ているんでしょうけども、そこで突き詰めた議論が地方自治体も国のレベルでも今必要な時にきているんじゃないかなという気がします。そのことを少し乗り越えながらあるいはテストしながら、改めて地域と住民自治のあり方とか集落のあり方も含めて次の時代の青写真も見えてくるんじゃないかなという気がします。今のところ今日のシンポジウムもそうですが目先の問題を整理していく、その対応策を考えてく所で終わってしまうんじゃないかという危機感も感じている、その先があるだろうと。それは自治のあり方の姿をどう描くのかということが大事な時期に来ているのではないかなと。特に混沌としていますから来年はぜひ島根においていただいて・・・町長さんよろしいですよ。そんなテーマの議題に入れてできればという思いをしているので・・・石見の国はいいんですよ、ええんじゃき来てみんな、ということで私の発言を終わりたいと思います。

小田切氏

ありがとうございます。非常に重要な問題提起、おそらく安藤さんの所で行われている社会実験がある回答を出してくれるんだと思います。その意味で今の問題提起は来年のこのシンポジウムで宿題としてですね、とっておくということにしていきたいと思います。

ここで遠藤さんから全体のまとめということでお聞きしたい所なんですけど、ちょっと時間もなくなっておりますのでまず皆さん方から質問を1、2問いただきましてその上で遠藤さんから場合によってはその回答を含めてまとめをしていただきたいと思いますがいかがでしょうか。会場の皆さんから・・・(手が挙がる)
・・・はい、では真中から手が上がりました。マイクが到着しますのでそこをお願いします。

質問者

山梨県道志村の藤原と申します。よろしくお願いします。1点だけ…わが村も若者はいるんですけれども非常に結婚をしていない若者が男女共におります。もちろん女性は結婚しますと都会へほとんど出てしまいます。残るのは男性ばかり、この辺を皆様の知恵でなんとかいい方法あったら教えていただけたらと思います。よろしくお願いいたします。以上です。

小田切氏

おそらく各自治体とも1部では対策を取られているような所もあろうかと思いますがこの点については…平尾市長さん、よろしくお願いします。

平尾氏

ものすごくリアルな話なんです。本来結婚は個人の選択ですからこのことに行政、公が入ることではなかったんです、今までは…。けどおっしゃるように地域的な状況を見ました時に個人の選択ではあるけれども、結婚をお勧めするということは公としてやっていいと私は思っているんです。そういう意味では従来の農村の結婚相談員制度がありましたけれども、嫁探しというんですか…あの組織ではありますけど私は米原市内も含めて結婚相談員制度を今拡充してぜひ従来あった絆や、いわゆるおせっかいをやいて欲しい、ということで市民の皆さんには呼びかけていますし、そういうシステムを新しく作ろうということでやっています。そのことが実はこの水源の里における状況も含めて水源の里の課題が水源の里の課題で終わっているのではないんだ、ということを市民の皆さんに知ってもらう、そういうきっかけ作りもさせていただいています。ほんとに私は今の時代の大きな課題だと思っていますので、ぜひ、私どもでは相談員を増やす所までしかいっていませんけどもそこから解決を見つけていきたいと思っています。よろしくお願いします。

小田切氏

ありがとうございます。この問題については実は新潟県の旧山北町…今、村上市ですが週末百姓をやってみたいというですね、都市農村交流活動の中で実は縁結び対策を結びつけるという新しい手法が開発されています。本来なら私ぜひそれを説明したいんですが残念ながら時間がありません。インターネット上で週末百姓をやってみたいと調べていただきますと詳しい経過報告などが出てきます。新潟県の旧山北町です。もう1点だけご質問ありましたら受けたいと思いますがいかがでしょうか。あるいはご意見でも構いません。

質問者

すいません、京都の京丹後市なんですけども。質問のような質問でないような…ちょっと言ってみたいなと思って手を挙げさせていただきました。今日はいろんなことを勉強させていただいて、これからの集落の活性化のために農商工連携ですとか、あるいはいろんな人づくりですとかあるいは手作りの自治区ですとか、いろいろ教えていただいたんですけども資料の中で見て感銘しましたのは、8頁にある幸福の経済学という下りで大きな幸せ作り、幸福作りという観点で小田切先生の資料に書かれてるんですけど、ぱっと思いましたですね。これじゃないかと。

というのは、いやな言葉ですけど限界集落…高齢者の方が多い、ということは我々の大きな特色の1つとしては、死と接する機会が都市と比べると多いというのがあると思うんですね。ほんとしょっちゅういろんな方がお亡くなりになられてお葬式とか行かしていただくんですけども、そういう死と接するにあたって、逆に市

政のあり方を改めて考えていくというような機会というのも非常に多いと思うんですね。同時にまた水源の里ですから、水とか食料とかあるいはエネルギーとか二酸化炭素というのは裏返せば空気ということですから、人の生に直接関わるような材料がありのままの状態では白紙の状態であるのが我々の集落でもあると思うんですね。そういう意味で生を死と接して生を改めて考えてそういう生きるにかかせない材料とともに考えていくというようなことが、特徴だと改めて生き方、幸福というのは何だろうなというのを考えながら活性化を果たしていくというのが大きなテーマなのかなといったときに、この水源の里の大きな取り組みの1つの方向というのは言葉で言えば幸福作りとか幸せづくりとか、そういうのがこのシンポジウムの大きな背景なのかなと思ひながらちょっと言ってみたくて発言させていただきました。

小田切氏

どうもありがとうございました。我々の議論に対するエールだろうと思います。どうも我々はどうしても手段を目的化してしまうということを日々行っています。その戒めとして、究極の目標はなんなのかということを考えながら地域振興、あるいは行政に取り組む必要があるんだろうと思います。その時にやはり幸福作りという、人によってはくちばしが黄色いという風に言われるかもしれませんが。しかしそこをきちんと抑えなくては行けない。それが私たちの主張の論点でございます。どうもありがとうございます。

さて残念ながら時間になってしまいました。本来ならもう一巡りして遠藤さんからのまとめを受けたいところなんです。最後に遠藤さんからまとめていただいてそして残った所を私が整理させていただきたいと思ひます。ぜひ遠藤さんお願いします。

遠藤氏

まとめなんていうのもおこがましいんですが、今皆さんのお話を伺っていて、やはりこうした地域にとって必要なのは1つは問題の数だけそれに見合った形での解決方法、政策が必要なのかなということが1つあると思ひます。小田切先生の資料にも新しい型、ソフト型の事業が出ているという風にあります。けれどもこういうものを積極的に生かしていく必要があるのかなという風に思ひます。それと観念的な話になって恐縮ですが、青砥さんの話を聞いていて思ったんですが、やっぱり人は皆に見つめられたい、認められたい、そういう思いがあるのかなという風に思ひます。だからこういう地域は私たちが生きていく中で必要な所だ、大事な所だということを国の中でも積極的にバックアップして発言していく、認めていく、見つめていく作業が必要なかなという風に思ひます。

それと今幸福作りという話が出たんですけども、それはとりも直さず新しいものさし作りに関わってくるんだろうなという風に思ひますけれども、安藤さんの話の中で自己決定…自己責任、自己実現という話が出ましたが、私はこれに自己肯定というキーワードを付け加えたいなという風に思ひます。つまり人は皆人間らしく自分らしく幸せに生きていって幸せに死んでいきたい、そういう風に皆思っていると思うんですね。その中で幸せだとか自分らしく、人間らしく生きているなという風に思えるのはやっぱり自分を肯定できることなんだろうなと思ひます。

ひるがえって私、自分自身が中山間地域に取り組みながら活動していますけれども、それってやはりどこに根源があるのかな、自分が今こうして自己肯定できる根源がどこにあるのかなという、やっぱりこのふるさとにあるのかなという思いがしています。つまりふるさとで生きてきた記憶がこういうことに繋がっているのかなと皆さんのお話を伺いながらひしひしと感じている所です。そういう意味でふるさとに感謝したいです。し今日ここにお集まりの皆さん、多分ふるさとを抱えてらっしゃる皆さんだと思いますので、ぜひ自己肯定の活動を通して新しいものさし作りをして新しい産業化のモデルというのを積極的に提案していただきたいと思います。

という風に思います。以上です。

小田切氏

ありがとうございました。素敵なキーワードをいただきました。いわゆる限界集落の最大の問題はあきらの広がりです。それを避けるためにも自らの生き様をきちんと評価してそして肯定的に捉えるということは本当に必要なことだろうという風に思います。

それでは、私からも若干整理させていただきたいと思います。今日2つのことを議論させていただきました。1つは地域で何をすべきか、そして2番目には行政で何をすべきかということです。

特に1番目の地域で何をすべきかということについては、かなりまとまった方向性が出てきたんだろうと思います。1つは何よりも地域をきちんと調査をする、時間をかけて調査しなくてはいけないんだという事が出てきました。2番目には誇りや自信を情報発信と共に作り上げていく、そしてそれを情報発信して逆に情報発信することによってその誇りを広げていく、そういうことの必要性を訴えていただきました。そして3番目には新しい価値を地域の中から見出していくということ、特に青砥さんの実践から教えていただきました。そして4番目には手作りで仲間とともに歩むことの必要性、その自己実現が何よりもあきらめを払拭するんだということを私達に教えていただいたんだろうと思います。

その点で実はこの1番目の地域で何をすべきかというのはかなりまとまった、今申し上げた4つの段階を踏んで、実は水源の里はまさに離陸していくというそんな方向性を私達に語っていたんだろうと思います。そして2番目の、行政は何ができるのか。何をすべきか。ということです。これは残念ながら十分な議論が出来たとは思えません。ただしかなりはっきりしたことは、現在の行政はもっと地域を見つめるべきだということです。市町村合併によって、そういった地域を見つめるというそういう機能が急速に低下してきた。とりわけ水源の里をめぐることはそのことがはっきりいえるんだろうと思います。

その意味で行政をくみかえて、行政改革と言うよりも行政強化をすることによって、そんな地域を見つめながら地域と共に行政が発展するんだというそういう志を強く打ち出すことが何よりも水源の里自治体に求められている。しかし課題には残っております。例えば市町村、県、国の役割分担が何なのか、このことについては残念ながら十分な議論が出来ませんでした。国は新エネルギーとか国土とか、いわば県、市町村が出来ないことをやるんだということを白井市長さんからいただいたわけですが、さらにその上で国が何をすべきかということを充分議論できませんでした。おそらくこの話はさきほど申し上げましたようにこの水源の里島根大会に持ち越されて、そこでさらに詳しい議論がされるんじゃないか、そんな風に座長として期待してみたいと思います。

時間となってしまいました。かなり今申し上げたように濃密な議論ができたと思います。それはやはりなんといっても4名のパネリストの方々、青砥区長さん、白井市長さん、平尾市長さん、安藤理事長さん、この方々が今までの実践に基づいて問題提起をしていただいたからという風に思います。そして何よりもコメンテーターとして加わっていただきました遠藤さん、まさに喜多方市の誇りでございます。この遠藤さんが加わっていただいて幾多の論点の整理をしていただきました。5名の皆さんにみなさま大きな拍手をしていただきたいと思います。